

★特集★ 高松城を発掘する！ その1

最近、史跡高松城跡の周辺で発掘調査が行われるようになってきました。そして、今まで絵地図や古文書でしか知ることができなかった高松城の様子が、しだいに発掘調査によって明らかになってきました。そこで、みなさんを発掘現場に案内したいと思います。

4・5ページに案内図があるよ！

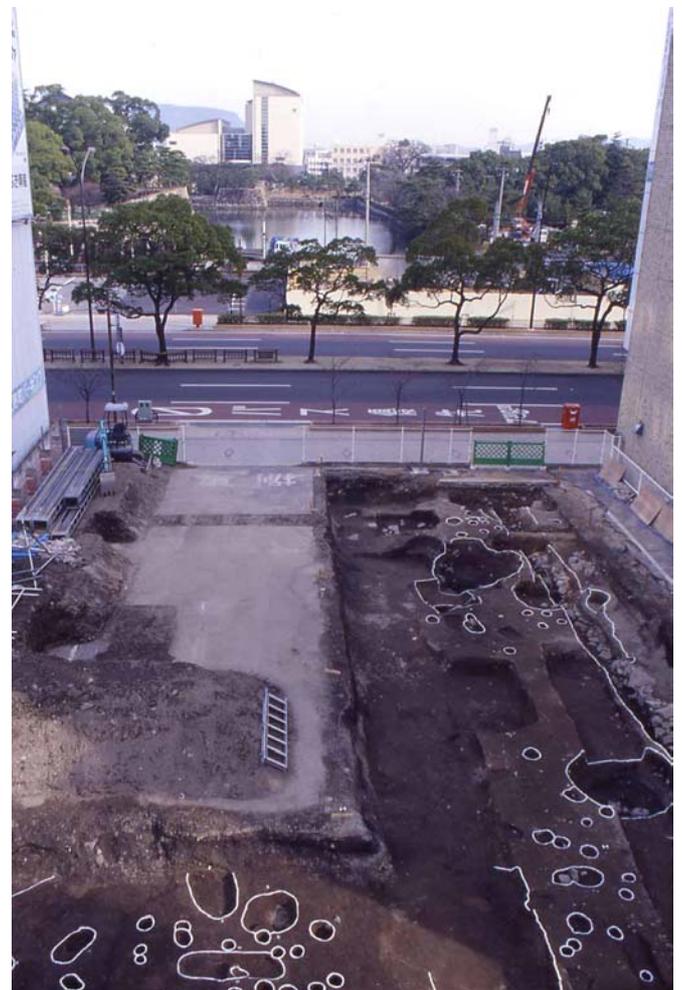
高松城とは？

高松城は、豊臣秀吉の家臣であった生駒親正が天正15年(1587)に讃岐国へ入り、翌年から親正によって築城されたといわれています。この城は、三重に堀がめぐって守りが堅く、堀へ海水を引き入れた水城として有名です。生駒家は4代続きますが、寛永19年(1642)には松平頼重が新しい高松城主(藩主)となります。松平家は11代頼聰まで約230年間居城していましたが、明治4年(1871)の廃藩置県により廃城となり、その後天守閣が壊され、堀のほとんどが埋め立てられるなどしました。昭和29年に市が譲り受け、玉藻公園として開放し、多くの市民に利用されています。

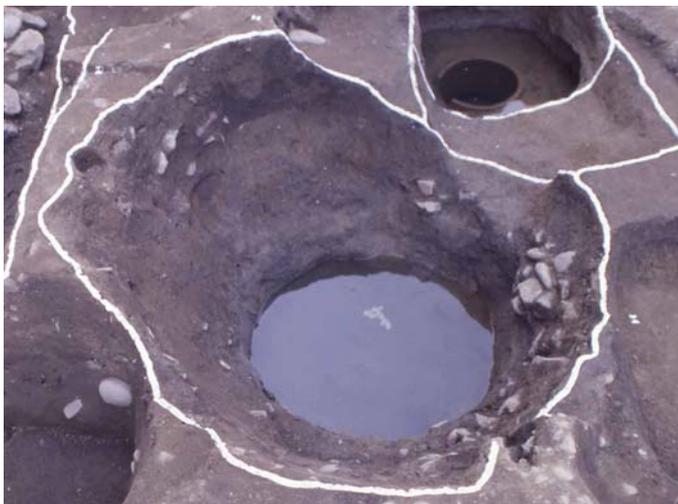
寿町一丁目

中央通り沿いで発掘調査が行われました。場所は、右の写真を見てください。手前が発掘現場、真ん中に中央通り、奥に内堀、白い建物が香川県歴史博物館です。ここは、中央通りとJR高松駅を結ぶ道路を建設することで発掘調査が行われました。平成14～15年にかけての冬です。

発掘調査では生活面が3面見つかリ、もっとも下の面が中世、上の2面が近世(江戸時代)です。中世では、高松城築城によって移転させられた無量壽院という寺跡が見つかりました(「むかしの高松」第18号を参照)。築城以後は、絵地図によれば、生駒隼人の下屋敷として、この地が利用されていました。松平家に藩主が代わると、最初の頃は馬小屋が描かれていたり、後には近くに薬園という名が見えたりしています。発掘調査では、直接、絵地図と結びつくものは見つかりませんが、発掘調査で見つかった遺構や遺物は、これら屋敷や城の施設に関するものだと考えられます。



発掘現場風景 西から東を見る



井戸跡

高松城内の発掘調査では、井戸跡が時々見つかります。井戸跡は、素掘りの簡単なものや、石組みのもの、木枠をはめ込んだもの、土製の枠を使ったものまでさまざまな種類があります。高松城および城下町は、当時としては珍しい上水道が整備されていましたが、それでも不足したのか、井戸もたくさん掘られたようです。江戸時代においても水不足に悩まされていたことが知られており、当時の人々の水への想いが伝わってきます。



土坑

土坑は発掘調査でよく見かけられ、ものを埋めたり、水などをためるために掘られた跡だったりします。写真の土層観察用断面を見ると、赤い粒々をたくさん見ることができます。これは、火災で焼けた土の塊で、ほかに炭化物も見られました。江戸時代には、たびたび大きな火災があったことが古文書に記されており、この溝も火災によって生じた廃棄物を捨てるために、埋められてしまったと考えられます。



柱穴

発掘調査では、たくさんの柱穴が見つかりました。写真にある白線で囲んだ円形が柱穴です。これは、掘立柱建物や柵・塀などの柱を建てるために掘られた穴と考えられています。形は円形のものほとんどで、直径が10 cmぐらいのものから50 cmぐらいのものまであります。



石組み

写真中央を縦に並んでいるのが、見つかった石組みです。向かって左側(南)に平坦面をそろえていることから、石組みの右側(北)が当時は高くなっていたと考えられます。ただし、上部が削られており、建物跡などは見つかりませんでした。

大型井戸

高松三越北側の駐車場を発掘したところ、東西約 3.9m、南北約 5.8mの大きな長方形で、高さ 1.6m以上の石垣で囲まれた大型井戸が見つかりました。石垣の隙間からは水が湧き出し、常に深さ 50 cm以上も水がたまっていました。

さらに、井戸の南側には昇り降りをしやすくするために、東西 7.4m、南北 2.1mの踊り場が設けられており、そこには玉砂利が敷き詰められていました。石垣はすべて花崗岩の割石を使っており、北西隅の石には⊕と扇形の刻印が施されていました。井戸の主な使用時期は、扇形の刻印が生駒家の家紋であると考えられることや、出土した陶磁器などから、生駒家が治めていた江戸時代初期の頃であったと考えられます。このような特殊な井戸の発掘は高松城内で初めてのことであり、どのような目的で井戸が造られたのか今後の解明が期待されます。一方、この場所に井戸が造られた理由については、井戸の下に中世に埋没した川跡があつて伏流水が豊富であったためと考えられ、これ以外にも数多くの井戸を発掘しました。

さて、調査地は、絵地図などから生駒家の末期には「浅田図書」「生駒左衛門佐(?)」の屋敷があり、次いで松平家初期には「間嶋半右衛門」「松田庄左衛門」の屋敷があつたことがわかっています。発掘調査でも、松田庄左衛門の弟の「松田庄九郎」の名が墨で書かれた木簡(荷札)が井戸から出土しており、絵地図どおりに家臣たちの屋敷地であつたことがわかりました。さらに、絵地図によれば江戸時代後半には厩の馬場として利用されていますが、そこには「井戸址」という添え書きも見られ、井戸が埋められた後も人々の記憶に残っていたことがわかります。



刻印石 大型井戸の北西隅石



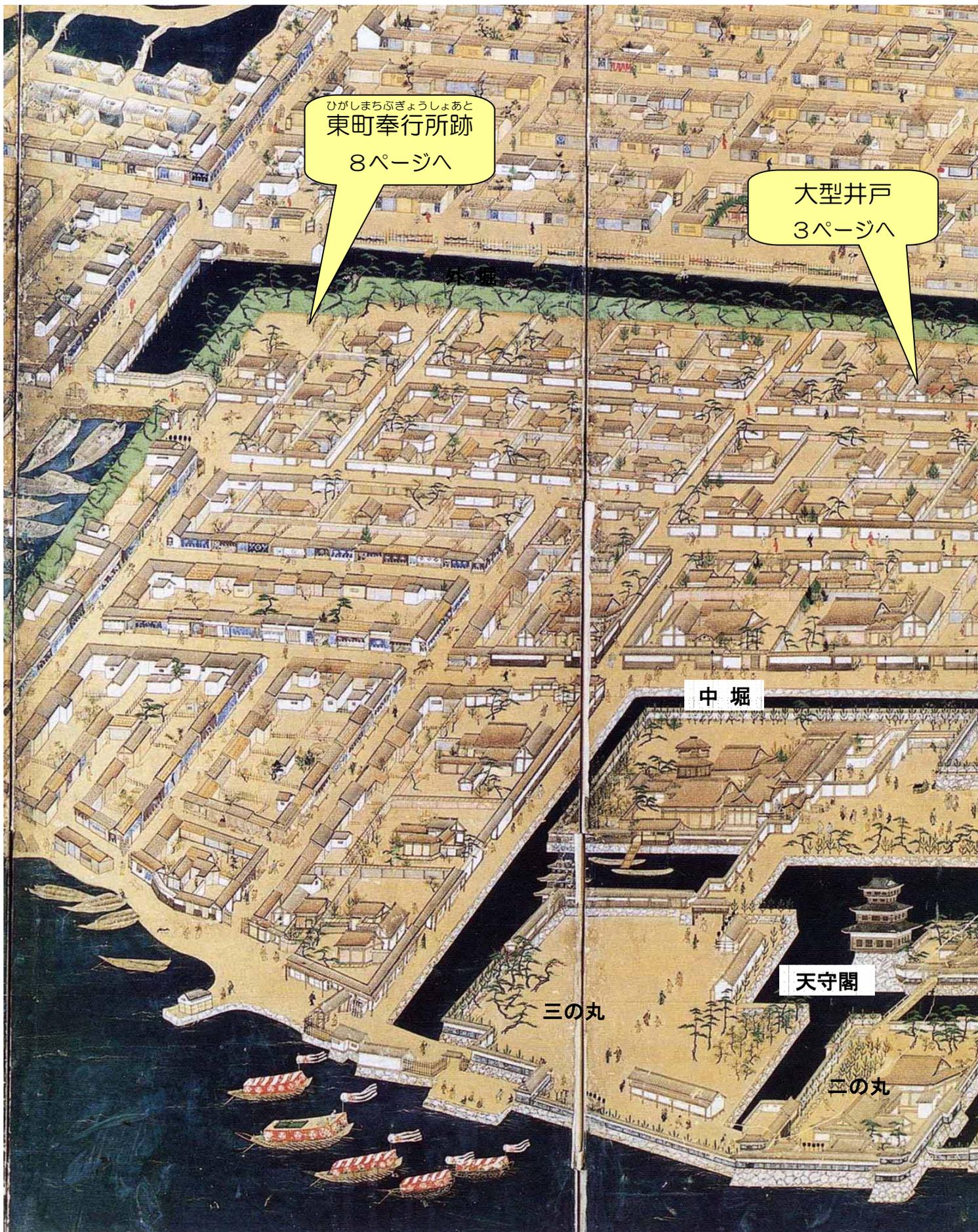
軒丸瓦出土状況



大型井戸 南東から撮影。左手前に踊り場がありました。



「松田庄九郎」
木簡(荷札)



ひがしまちぶぎょうしょあと
東町奉行所跡
8ページハ

大型井戸
3ページハ

中堀

天守閣

三の丸

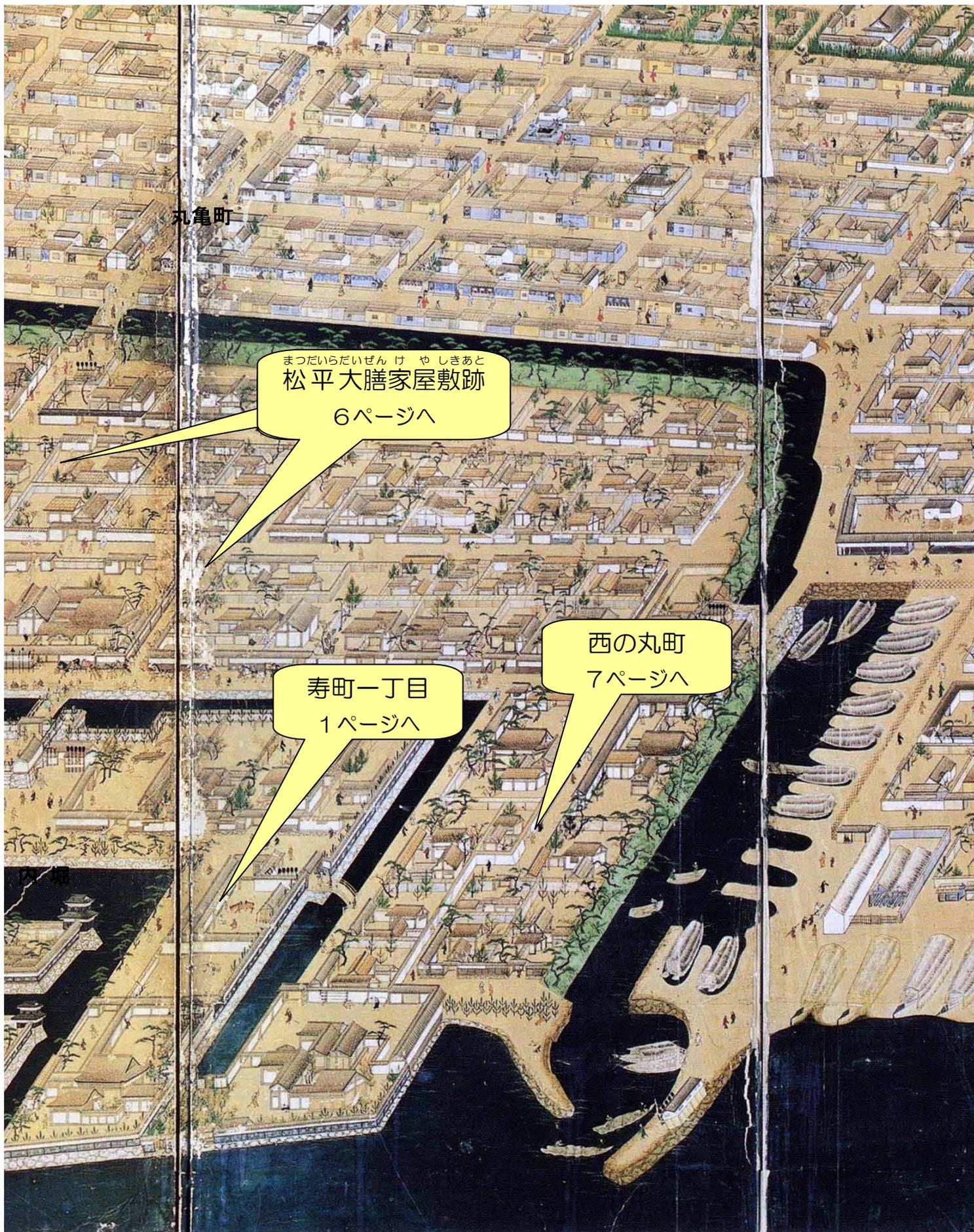
二の丸

たかまつじょう か ず びょうぶ

高松城下図屏風 (香川県歴史博物館所蔵)

まつだいらよりしげ てんしゆかく

初代高松藩主松平頼重が天守閣を修築した時の様子を



丸亀町

まつだいらだいぜん け や しきあと
松平大膳家屋敷跡

6ページハ

寿町一丁目

1ページハ

西の丸町

7ページハ

描いたと考えられています。北から南に向いて、城下町全体を見渡す構図をとっています。

松平大膳家屋敷跡

松平大膳家は、初代高松藩主の子頼芳から分かれた支族で、代々2～3千石を藩主から賜わり、高松城南面の一等地に大きな屋敷を有していました。大膳家の人たちは、高松藩本家に養子入りして藩主の座についたり、阿波(徳島)蜂須賀家にも養子に入り藩主になったりと権勢を誇りました。

発掘調査では、大膳家の上屋敷と中屋敷の一部を調査することになり、これは今の高松家庭裁判所の北側と東側にあたります。上屋敷の調査地は、屋敷地の南西部分に相当し、屋敷地とともに南側と西側の道路も発掘することになりました。屋敷地南側境界では、整然と並んだ石列や柱穴が見つかり、その配置から東西に長い立派な長屋門が存在したことがわかりました。この門については、『高松市街古図(文化年間(1804～18年)頃高松城下図)』に描かれている門が、時代的にも近いものではないかと考えられています。屋敷地内では竹の樋や木箱の柵を使った上水道の配水管が見つかっており、外から屋敷地内の井戸へ配水していたことがわかりました。出土品の中には、上級武士にふさわしい高級な陶磁器などとともに、大膳家の家紋をあしらった軒丸瓦が出土しており、調査地が大膳家の屋敷地であることを示しています。

一方、中屋敷では、興味深いごみ捨て穴が見つかっています。南北3.3m以上×東西約4.5m、深さ約70cmの大きなもので、中からは当時使われた調理・食器類や瓦などが出土し、その量はみかん箱100箱以上にも及ぶものでした。出土した碗や軒丸瓦には、大膳家の家紋を施したものもありました。出土品の内容や漆器碗の中に食べ残しの魚の骨があることから、このごみ穴は大膳家の当主代わりの時など大きな節目に催された宴の後始末に掘られた可能性があります。



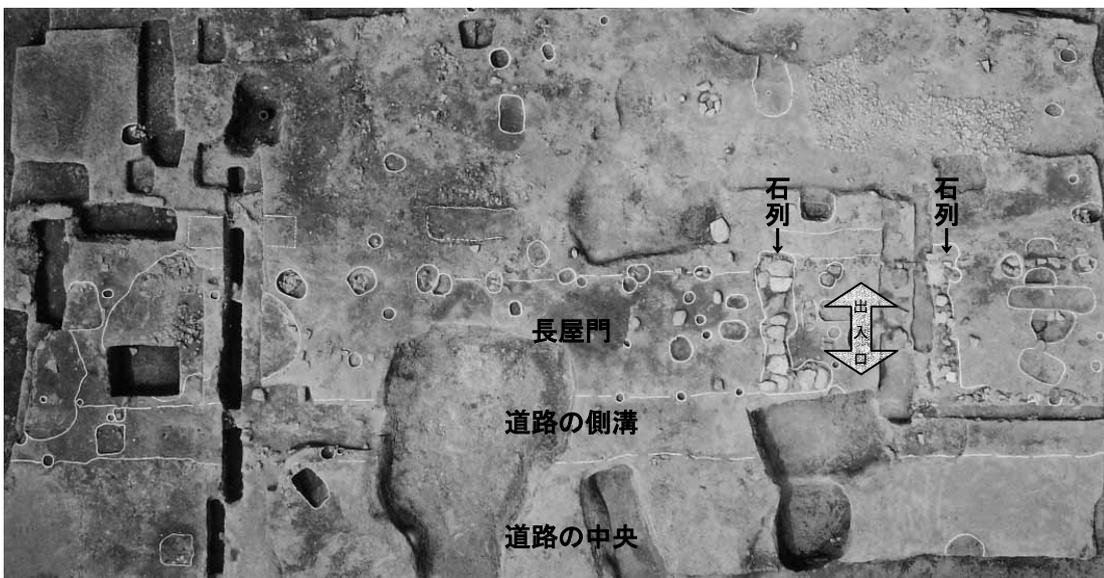
大膳家紋入碗
丸に中陰四つ葵が描かれています。



中屋敷で見つかったごみ捨て穴
大量の陶磁器や土器、箸や漆器碗などの木製品が出土しました。



絵地図に描かれた門
上が上屋敷、下が中屋敷です。



上屋敷写真
真上から見た写真で、茶色が長屋門、水色が道路の側溝の範囲です。石列の間が出入口で、長屋門北側に柱穴が等間隔で並んでいます。

西の丸町

サンポート高松整備事業に伴って、香川県埋蔵文化財調査センターがJR高松駅周辺を発掘調査しました。この付近は、高松城の中堀と外堀にはさまれており、城の西側にあたる地域です。調査面積が広く、いろいろな発見がありましたが、ここでは主な3つについて紹介します。



鍵型の道路

『高松城下図屏風』には、かぎ型に曲がった道が描かれています。発掘調査でも、かぎ型に曲がった道路の側溝や塀の柱穴が見つかりました。このように絵地図と対応できる遺構が見つかることにより、



『高松城下図屏風』に描かれた鍵型の道路

江戸時代の屋敷の区画を現代の地図に正確に重ね合わせることができるようになります。



武家屋敷

調査地には、江戸時代を通して重臣たちが屋敷を構えていたことが絵地図から推測されていました。生駒家の時には、上坂勘解由の屋敷地となっており、発掘調査では彼が木材を購入したことを示す木簡が出土しています。松平家の時には、代々大老職を務めた大久保家の屋敷地になり、写真にあるような家紋瓦などが発掘調査で出土しました。



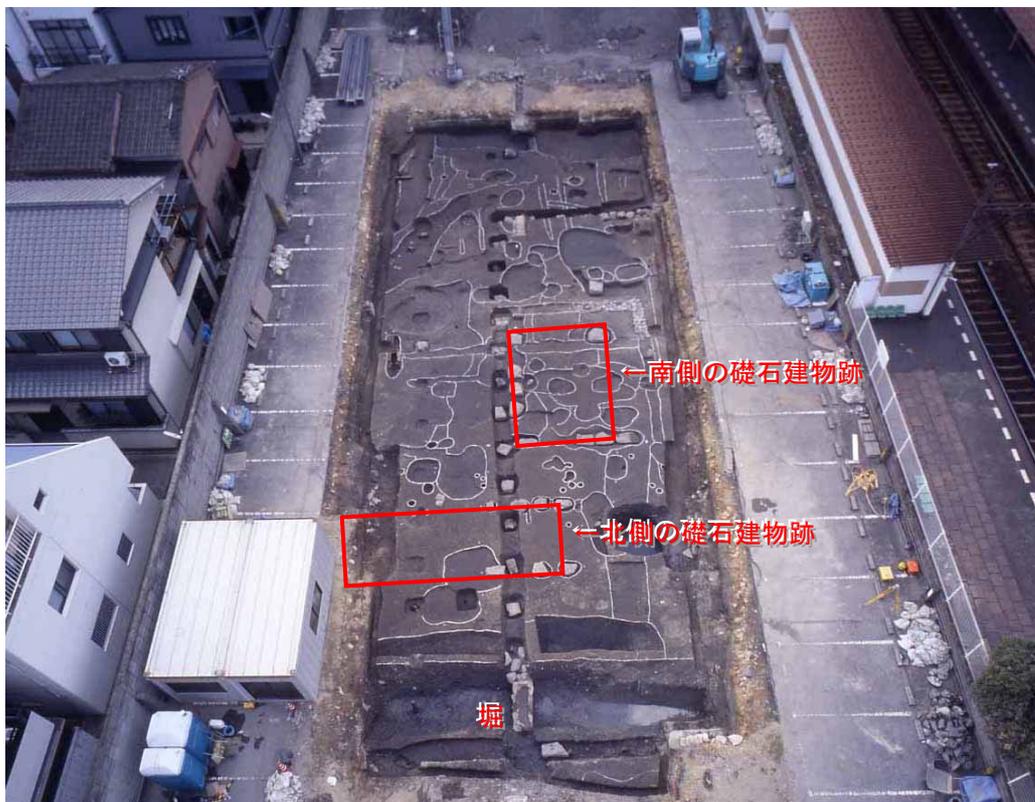
拡張された高松城

城域の北端を発掘調査したところ、東西方向の5列の石垣が見つかりました。海の方へ向かって順に石垣が築かれており、江戸時代前半～明治頃までのものです。これによって、生駒親正の高松城築城以降、4度にわたって海を埋め立てながら、高松城を拡張していったことがわかりました。そして、現代ではサンポート高松整備で市街地が広がっているのです。

【遺構・遺物写真は、香川県埋蔵文化財センター提供】

東町奉行所跡

コトデン片原町駅の東側を発掘調査しました。絵地図によると、この地は江戸時代前半には武家の屋敷地でしたが、後半には東町奉行所がおかれていたと想定されていました。発掘調査では、東町奉行所のものにふさわしい礎石(建物の基礎石)や堀が見つかりました。礎石は、安山岩の平坦な自然石を使用して整然と並べられていました。そのうち南側のものは、東西約 3.9m、南北約 5.9mの建物が建っていたと復元され、この建物の周囲には割石を敷き詰めた溝がめぐらされており、非常に丁寧に造られていました。また、北側のものは東西に長い建物が建てられていたと推定されています。一方、堀は調査地北端で東西約 10m分を確認しただけですが、深さ 1.6m以上、幅が約 8 mと推定される大規模なものです。堀は途中で北へL字形に折れているようです。他地域でも、大きな堀を奉行所の周囲にめぐらせる例があることから、この堀は奉行所のものと考えられます。明治時代になると、この地に鶴屋町尋常小学校が建てられていたことが知られており、この小学校校舎の礎石列が発掘調査でも見つかっています。



発掘調査地全景 北から南を向いて撮影したもので、右奥がコトデン片原町駅です。中央を縦に並んでいるのが小学校校舎の礎石。写真中央に示したとおり2棟の礎石建物跡があり、手前に堀があります。

編集後記

今回は、高松城跡のうち玉藻公園の周辺で行われた発掘調査を取り上げました。江戸時代といえば、時代劇のイメージをお持ちでしょうが、この冊子ではどう感じられましたか。今後も発掘調査によって、高松城のことが明らかにされていくことでしょう。次回は、いよいよ高松城本丸に迫ります。ご期待ください。(S.K)

むかしの高松

第19号 2006.3.31

編集発行／高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
TEL087-839-2660
<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/>